

まえがき

平野憲雄

まずは、技術室報告5号を発刊できたことを投稿者はもちろんのこと編集に当った皆様に深く感謝申し上げます。この技術報告は退官される技官からの投稿がセールスポイントです。今年度は、多河英雄技官と中川渥技官のお二人が定年退官されます。長い間ご苦労様でした。多河英雄技官はソフトウェア関係に長い間携わり、現在は所内のパソコンのトラブル（ウイルスやハードディスクのクラッシュなど）の迅速なる対応や、毎月2回開かれているDTPセミナーでは所内職員のパソコン管理技術の底上げ的な指導をされてきました。一方、中川渥技官は電気回路設計製作関係に長く携わり、アナログからデジタルに渡る専門技術でこつこつと精度の高い回路を設計製作され、観測現場では必須の技術分野を担当されてきました。お二人とも技術室にとって貴重な存在でありました。まだまだ現役でがんばれる技術者です。惜しくも定年退官退となりますが形を変えた立場で社会への貢献をされるであろうと期待します。

今年度は若い技官が2人採用されました。若手勢力が昨年度の3人から5人へと増え、平均年齢を下げる立役者になっております。特に、若手の5人だけで「青少年科学の祭典 京都大会」に自作の模型を出展し、小中学生たちに科学への興味をもたせる役目を担ったり、プラズマディスプレイを2台直角に配置して仮想の3次元映像装置を製作し、札幌市で行われた「国際測地学地球物理学連合2003年総会（IUGG、6月30日～7月11日）への出展に始まり、京都大学国際融合創造センター（IIC）や地震学会京都大会へも出展できたことは、技術室の存在感を大いに宣伝してくれたと有難く思っています。昨年度は28年ぶりに若手が採用されて新しい風が吹き始め、今年度は技術室の表看板になるくらいの力強い風が変わりつつあります。年配技術者達の出る幕が少なくなくなるのではないかと危機感と、ますます頼もしくなっていく若手への期待感が入りまじったものを感じるのは私だけではないと思います。

もうひとつ特筆すべきことがあります。それは、宇治キャンパス公開が毎年行われていますが、今年は初めて宇治川オープンラボラトリーの公開もすることになり、技術室が客寄せ？から案内までを担当したことです。企画の段階から心配した点は見学者をいかに多く呼べるかでした。鉄道駅から近くメイン会場となる宇治キャンパス（4研究所と1センター）と比べ、宇治川オープンラボラトリ会場の面積は見劣りしないが、鉄道駅からかなり離れたところで交通の便が悪いことでした。それにも係わらず60名の参加を得ることができたことは、手前みそですが初めての企画にしては合格点だろうと思います。この場を借りて実験を担当された教官の方達や技官、学生の方々に深く感謝申し上げます。来年度に向けた反省点を上げるとすれば、見せたい側の考えと見たい側の考えは必ずしも一致しないことが判り、これをどのように処理するかです。日頃の基礎研究の現場を一般に公開するのが目的ですから、面白くなくて当然の部分もあるでしょう。大学の実験施設は博物館のように見学者向けの施設でもなく、黙っていても沢山の見学者が来てくれる好条件の施設でないことは明らかです。せめて年1回の施設公開に訪れる見学者を増やすには、もう少しサービス精神を演出し、面白くして見せる工夫も必要かと思えます。

これはより多くの人達に知ってもらうための考えであり社会貢献を大きくすることにもつながるものであると思います。技術室に今後求められる演出能力だと感じさせられました。苦勞して立てた案内看板に気がついてもらえなかったなどは、見学者側の立場に立ってなかった証拠でもありましょう。アンケートの結果など詳しくはトピックページに掲載しました。